# 日本家庭用殺虫剤工業会創立40周年

## 「安全に正しく使う」啓蒙に注力

ごあいさつ

日本家庭用殺虫剤工業会
会　長
上山　直英

みなさま本日は大変お忙しいところ日本家庭用殺虫剤工業会の40周年記念式典にご出席を賜りましてありがとうございます。大阪府、和歌山県、京都府、兵庫県、広島県の行政官庁の方々、大学、研究機関その他関係諸団体の方々にも多数ご出席を賜りまして誠にありがとうございます。高い席からではございますがお礼を申し上げる次第です。また、東日本大震災で被害を受けられたところもあると思いますので、心からお見舞い申し上げます。

工業会の歴史を紹介しますと、「日本除虫菊研究所」と「日本除虫菊工業会」が昭和46年に合併して「日本殺虫剤工業会」が発足しました。そして、今から10年前の30周年の時に「日本家庭用殺虫剤工業会」と名称を変更いたしました。

まず、なぜこの会の前身の団体に「除虫菊」の名前がついていたのかというと、除虫菊は、ユーゴスラビア、今のセルビアやクロアチアの近辺が原産地の植物です。15世紀ごろにその殺虫効力が発見されました。その種が明治時代にアメリカ経由で日本に入ってきました。そして、日本で蚊取線香が発明された後、除虫菊の栽培が盛んになり、昭和の初めのころには、日本の世界に対する除虫菊の輸出は、原産地のユーゴスラビアを抜いて世界一になりました。つまり、このころ、世界中の殺虫剤原料をほとんど日本が供給していたことになります。

### 日本独自の発展で殺虫剤世界へ
### 環境配慮型製品開発の活動継続

１９３８年（昭和13年）にスイスでＤＤＴが開発されるまで、世界中で使われていた殺虫剤の原料は除虫菊しかなかったわけです。

第２次世界大戦前は、除虫菊関連の製品を扱う会社が１４０社ほどあり、商品の品質を維持するために、除虫菊の検定や成分の研究をおこなう「日本除虫菊研究所」が設置されておりました。戦争によって除虫菊の栽培が減り、戦争の相手方のアメリカも殺虫剤の原料が入手できすに困ったわけです。そこで除虫菊の有効成分を化学合成できないかという研究が始まったわけですが、アメリカは、スイスで開発されたＤＤＴを積極的に使うという方針に転換しました。戦争が終わってから除虫菊に含まれる有効成分ピレスロイドの化学構造をつきとめたのはこの工業会のメンバーです。

そして、昭和28年に特別会員の住友化学さんがピナミンという名前でこの合成ピレスロイドを製品化されることになりました。戦後の復興が軌道にのって、「もはや戦後ではない」と言われはじめた昭和32年に除虫菊の栽培普及と家庭用殺虫剤の販売をおこなっていた18社が「日本除虫菊工業会」を設立しました。そして、昭和46年に戦前の「日本除虫菊研究所」を併合して、現在の「日本家庭用殺虫剤工業会」が発足することになったわけです。

除虫菊の成分を元にした有効成分の開発も積極的におこなわれまして、現在家庭用で使われている殺虫剤の有効成分はほとんど除虫菊由来成分です。ＤＤＴやＢＨＣなどは蓄積と残留という欠点があり人体や環境に害があるということで、１９７０年代以降は世界でも使われなくなりました。

結局、温血動物では体内で分解されて残留も蓄積もしない、さらに長く太陽にさらされると自然界でも分解してしまうという特徴を持った、除虫菊由来の成分だけが継続して使用されることになったわけです。

そのように有効成分の開発面でもこの工業会メンバーは世界の最先端を走ってきましたが、そのデバイスの面でもやはり世界の先頭を走っております。蚊取線香をはじめとしてかとりマット、液体かとり、くん煙剤といった商品は、全て日本で開発されて、世界に広まっていった製品です。それから今では化粧品や塗料その他に使われているエアゾールを日本で最初に開発したのもこの殺虫剤業界です。近年では、害虫の侵入を防止する虫よけプレートや電池式かとり、ワンプッシュのエアゾールといったものが開発されましたが、こういったものもまだ日本にしかありません。つまり、明治以降、世界から新しいものを取り入れ、世界を手本にしながら成長してきた産業はたくさんありますが、殺虫剤業界は日本で独自の発展を遂げて、そこから製品が世界へ出て行った数少ない産業だと思います。

ただ、この業界は、日本では１０００億円程の規模で、それほど大きくありません。しかし、大変歴史の古い会員が多い業界で、小さいながらそれぞれ工夫を凝らして商品を作ってきました。また、長く続けるというのは大変意味のあることだと思います。続けることによって技術が蓄積され、新しい工夫も生まれてくるわけです。

世界的にみればアメリカではまだ西ナイル熱がおさまったわけではありませんし、デング熱やマラリアを媒介する蚊の生息範囲がだんだん北上してきております。殺虫剤という名前に物騒な字がついているだけに、いろいろと誤解を受けやすい商品ですが、我々工業会の目的は、水際で病気の蔓延を防ぎ、また、その製品を安全に使ってもらうための知識を広めることを目的にしています。

日本の家庭用殺虫剤として将来性はどうか？日本は人口も減る、環境が整備されて虫も減る。産業として大丈夫かという話はよく聞きますが、大丈夫です。

一つは日本人の虫に対する感受性が変わってきているということがあげられます。あるところで読んだ話ですが、ある時、ゴキブリがでて大騒ぎになったそうです。おとうさんも相手がゴキブリとなると、頼りにならない。そこへおばあさんが来て、私に任せなさいといったそうです。おばあさんはスリッパを脱いで、両手に持って、そろそろとゴキブリに近づいていった。すると、ゴキブリがぱっとおばあさんに向かってきた。そこで、おばあさんは、すかさず、足でゴキブリを踏み潰したそうです。こういう日本人は少なくなってきております。

それから、冬でも暖かく過ごせるようになったおかげで、冬でもビルの地下で蚊が発生するようになりました。より快適に暮らすために木を植えよう、花を咲かそう。近年のこういう傾向も大変結構だと思います。これは皮肉な言い方ではなく、人間とって快適であるというのは虫にとっても快適な環境なのです。我々の仕事は、より快適に暮らせるように生活環境を改善するお手伝いをしながら、そこへおじゃまをしてくる虫には少し遠慮してもらおうというビジネスで、明治時代の科学者の寺田寅彦が、自然をねじ伏せたと思っていると、いずれ大きな反発がくると言っているように、我々の仕事は、世界中の虫を全滅させるということではないと考えております。つまり、蝶、バッタ、トンボ、ハエ、カ、ゴキブリ。ゴキブリはもともと森に住んでいた昆虫ですが☒。そういうものがすごく沢山いて、しかし人のいるところには寄ってこない。そういう環境が人間にとっても、当工業会にとっても、良い環境だと考えております。こういうのを虫がいい話と言います。

さて、昭和46年に30社で発足したこの工業会は32社になりました（正会員18→17　特別会員１　賛助会員11→14）。いままで、殺虫剤をいかに安全に正しく使っていただくかという知識の普及と、環境に配慮した製品を造るということを活動の中心としてきましたが、これからもこの活動を続けていきます。

今年は、災害が起り大変なことになって、こういう時期に会をするのはどうかという話もありましたが、復興、そして節電が言われている中で私どもの業界としてお役に立てる部分もあると考えています。また、こういう時期だからこそ、私どものポジションを再確認して、引き続きお役に立てるよう頑張っていきたいと考えております。

今日の会の趣旨は、長くこの団体を支えていただいた方々に対するお礼という意味もございますので、お時間の許す限り、くつろいでお過ごし願えればと思っております。



# 京都で盛大に記念パーティー

## 大塚副会長「日本の殺虫剤は世界最先端」

日本家庭用殺虫剤工業会は16日、京都市内のウェスティン都ホテル京都で、「創立40周年記念パーティー」を開き、正会員・特別会員・賛助会員、行政関係者のほか工業会ＯＢなどが多数出席した。

冒頭、上山会長が開会のあいさつ（前頁で紹介）を述べた。来賓あいさつでは

上山会長

大塚副会長

福林専務

森友会長

まず、山本繁富・大阪府健康福祉部薬務課長が、橋下徹・大阪府知事からの祝辞を代読した。

そのあと、特別会員の福林憲二郎・住友化学専務が、「前日、工業会のホームページを初めてみたのですが、その中で、日本家庭用殺虫剤工業会は殺虫剤を通じて人と自然にやさしい快適な暮らしをサポートするという文章が目に飛び込んできました。上山会長はさきほど40年の歴史について触れられていましたが、まさにたゆまぬ努力で安心安全な製品を次々と開発され国民の生活環境改善に寄与していただいていることに感謝いたします。地球温暖化が進む中で外来害虫が日本に侵入してくることが危惧されます」と話し、さらに「震災被災地では瓦礫の撤去が中々進まず臭気がひどくなっていると聞いています。ハエや力が大量に発生し避難所にも寄ってきているようです。この件については今日ご出席の業界の方々にも行政から問い合わせがきていると思います。また、原発事故では、東京電力、東北電力に加え、関西電力も15％節電を要望してきておりますし、安全性の観点から原発が全て停止すると、生活習慣の中で生活環境を改善するという工業会の役割は、より節電に対応したカテゴリーを含めて新製品を上市していくことが大事ではないかと思います。これは会員各社はさることながら業界全体で対応を進めていくべきだと思います。私どももご協力させていただきたい」と述べた。

乾杯のあいさつで、森友徳兵衛・全国化粧品日用品卸連合会会長は、「今回の東日本大震災では、海外で事実とかけはなれた正しくない報道が目立っています。我々の業界でもメーカー様が付加価値のある心を込めてつくられた製品の想いが、１００％消費者に届けられているかというとなかなか難しいものがあります。私ども卸を通じて皆様方の想いを何とか消費者にお届けするということが使命であります。よく御医者様は病気のことはよく知っているが患者の気持ちはわかっていないという風に言われています。また、化粧品業界では、最近売上が悪くなっているが、きれいになりたい女性はどんどん増えています。一方、殺虫剤業界におきましては、暑い夏には殺虫剤がよく売れると思われますが、意外にあまり売れなかった年もあったと思います。なぜ売れなかったんだろうと分析しますと、あまり暑すぎると力が熱中症になったとか食欲不振になったとか、もっともらしく言われるのですが、笑い話ではなく間違いではないように感じます。虫嫌い人口はどんどん増えています。そして殺虫剤はとにかく用途や種類が多く我々も苦労するのですが、消費者は最適な殺虫剤をどう買ったらいいのかわからなくなっているようです。消費者のライフスタイルにあった殺虫剤を提案していくことが我々流通の役目だと思っています。日用品雑貨卸では、殺虫剤はメイン商品であり売場を活性化させていきたいと考えています。今年の夏もおおいに暑い夏になり、殺虫剤がどんどん売れることを祈念します」と期待感をあらわした。

中締めでは、大塚達也副会長が、「今日は工業会の歴代会長・副会長様や賛助会員などなつかしい方々がお集まりで盛大に40周年を祝っていただき誠にありがとうございました。業界の先代の方々が世界に誇れる殺虫剤を開発された実績があったからこそ我々が商売させていただけていると思っていますし、日本の殺虫剤は世界の最先端製品だと自負しています。これからも世界に誇れる新しいカタチの殺虫剤を開発して皆様方の健康と安全と快適な暮らしをサポートできるように精一杯努力してまいりたいと思っておりますので、今後とも絶大なるご支援ご協力を賜りたい」とあいさつし、一本締めでお開きとなった。